
未来で会いましょう

coach

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来で会いましょう

【Nコード】

N6580G

【作者名】

coach

【あらすじ】

中学二年生の悠斗は、幼稚園からの幼馴染みである葉月に長年彼女に抱いていた想いを伝えようとするのだが、告白しようと思っていた日に思いも寄らないことが起きて。タイトルから、SF的、異世界的、超現実的要素を期待なさった方へ。そのような要素は全くありませんのでご注意ください。

第1話：Xの日（前書き）

作者の「新しい物語を書きたい」病における発作の一つが本作品になります。最後まで書き上げた作品が何一つない中で、またぞろ別のものを書き始めるといふのはいかなものかと自分でも思っているので、抑えられず書き始めてしまいました。そのような者の手になるものですが、もしよろしければお読みください。

第1話：Xの日

室内はすっかり朝の光で満たされていたが、部屋の主はなお夢の中。カーテンが閉じられていない窓の下、広くない室内のおよそ半分を占めるベッドの上ですやすや寝息を立てている。十三、四といった年の男の子。随分とお行儀よく寝ているようで、外から見えるのはあどけない顔のみだった。手足はきっちりと掛け布団の中に収まっている。

窓外の電線から数羽の小鳥が自慢の美声を響かせたが、少年は微動だにしなかった。せいぜいが部屋の外にある電柱を羽休めに使っているだけの縁である。小鳥たちは、至高の音楽を解さない青二才に早々に見切りをつけた。そうして、もう少し心ある聞き手を探し青天に飛び立つたとき、キイ、と蝶番のきしむ音がして部屋の戸が静かに開かれた。

「起きて、悠斗ユウト」

その声は朝の光と鳥の歌よりは力を持っていたようである。うーん、と小さくむずかる声が少年の小振りな唇からもれる。

ぺちぺちぺち。

もう一度声をかければ少年の意識は覚醒したかもしれないが、おそらくはより確実性を高めるためであろう、彼の頬は軽く叩かれた。

ベッドの上の体もぞもぞと動き、顔がつつとうしろにそっぽを向いた。

「母さん、お願いだから今日は日曜日だと言ってください」

まだ半分寝ぼけたまま少年が懇願すると、

「わたしはあなたのお母さんじゃないし、なお悪いことに今日はお休みじゃないわよ」

彼の後頭部にかけられる張りのある声。その瞬間、掛け布団が宙を舞う勢いで大きくめくれ上がった。少年の足が蹴り上げたのであ

る。まだ体にかかっていた布団を、彼は小煩げにもう一度蹴ると、勢いよくベッドの上に体を起こした。完全に布団から出た状態で、おそるおそる頭を回すと、間近にスカートが見える。視線をちょっと上にあげると、こちらを見下ろす顔があった。

「う、うわああああっ！」

まるで人外の者でも見たかのような顔でベッドの上で後ずさる悠斗。しかし、彼の前にいたのは、怪物からはほど遠い容姿の少女だった。すっと伸びた背筋に凜としたものがあって、頭の上の方でしっかりとまとめられたポニーテールに清潔感がある。刀を持たせれば、邪を払うことができそうな凜々しさであった。

部屋の戸を突き抜けて家中に響き渡りそうな悲鳴を上げた悠斗に、
「だいじょうぶ？」

と少女は穏やかな声で尋ねた。

「葉月……ですか？」

「じゃなかったら誰ですか？」

「どうしてここに？」

「どうしてって……家の前で待ってたんだけど、あんたがなかなか出てこないからさ、小母おはさんに断ってあんたを起こしに来ただけ
ど」

「今、何時ですか？」

葉月が今の時刻を告げると、ベッドのスプリングが軽くきしんだ音を立てた。ベッドの上に両手をつき肩を落とした格好で悠斗の体が震えていた。

「何てことだ。ハツキに起こされるなんて」

「何言ってるの？ 時々してることじゃない。そろそろちゃんと自分で起きてもらいたいけどね、子どもじゃないんだからさ」

軽くたしなめるような声がかかるが、がっくりきている彼は聞き流した。

「ボ、ボクは寝坊したのか。こんな大事な日に」

「あのさ、何の遊びなの、ソレ？ 早く準備してよ。学校に遅れる

でしょ」

「今日は大事な日なんです」

「はいはい、そうですね。始業式ですから」

悠斗の戸惑いは葉月には伝わらない。彼女は、なおもぐずぐずして動こうとしない少年の脇の辺りを、ぐい、と取って無理矢理に彼を立たせた。

「ほら、階段下りて。洗面、朝ご飯、着替え。すぐにしな」

きびきびした声に追い立てられるようにして、悠斗は部屋を出ると、階段を下りた。彼の部屋は二階にある。階段を降りきったところで、後ろからついてくるとんとうんというリズムカルな音の方向を振り返った。葉月が両手に、学校用の鞆と制服を吊ったハンガーを握っている。悠斗の通学セットである。

「洗面っ！」

キツとした声音に叱られた悠斗は、逃げ込むように洗面所に入った。

洗面台で洗った顔をタオルで拭くと、目前にある鏡に、黒髪を肩と耳にかかるかどうかわくらの長さに整えた少年の顔が映る。髭とは無縁そうなたるりとした肌に繊細な顎のライン。少女のようなと言えば聞こえはよいが、多分に弱々しい印象が拭えない幼い顔立ち。その顔が決意の色に染まると、多少は男の子っぽく見えた。

悠斗にとって、今日は中学二年生の始業日ということとどまらない大切な日だった。

いや、そうなるはずである。彼の予定では。

幼馴染みに交際を申し込む日に。

「もうちょっとさ、シャキシャキ歩いてよ。誰かさんのおかげでギリギリなんだからさ」

数歩前を歩く少女からの威勢の良い声に、悠斗は、すみません、と力なく答えた。

空からは眩しいほどの日が降っていたが、悠斗の気持ちを明るく

するには足りない。

「ほら、早く！」

急きたてる声とともに、悠斗の手の中に滑り込むなめらかな手。驚いたのは、その手に、ぐい、と引っ張られたからではない。もつと根本的なことである。

「ハヅキ、ちよ、ちよつと待って下さい」

何よ、とわずらわしそうに振り返った彼女だったが、それでも急ぎ足は緩めない。手を引かれて歩く格好になっている悠斗の足も強制的に速くなる。悠斗は少し足に力を込めて立ち止まった。

「この状態はちよつと……」

「ちよつと何？」

「恥ずかしいです」

「じゃあ、サクサク歩く？」

悠斗がうなずくと、葉月の手は離れた。

姉に手を引かれる弟のような状態を免れてほっとした悠斗が、約束通り、幾分足を速めるとその横に葉月が並んだ。並ぶと彼女の方が少し背が高いのが分かる。悠斗は、しっかりとまとめられた髪によつてあらわになった少女のフェイスラインに、目が引きつけられた。きめこまやかな肌に、半月を少し膨らませたようなぱっちりとした瞳、つんと尖った勝気そうな鼻、艶のある薄桃色の唇が、うるわしく配置されていた。

「何よ、じろじろとさ」

ほれほれと見ていたその横顔が、軽くうつとうしそうな色を含んで真正面から向けられたので、悠斗はどきりとした。慌てて何でもない旨告げるが、

「なんか今日はおかしいよね、ユウト。わたしに隠してることあるでしょ」

と葉月はまっすぐに引かれた眉の根を寄せた。

悠斗は、何でもありません、と口早に答えると、彼女の疑いから逃れるように歩くペースを速めた。

隠していることはあった。が、それは隠したいことではない。むしろ、早く明らかにしたいことである。

幼馴染みの少女への愛の告白。

葉月とは幼稚園からの付き合いである。家が近く親同士が仲がいいこともあって姉弟同然に育てられた。彼女に愛情を感じたのはいつからなのか、それは良く覚えていない。気がつく大切な人だった。その彼女に自分の抱えている想いを告げねば、と思ったときは覚えていない。一年前の小学校の卒業式の日。葉月が他の男子から告白を受けて、その男子と付き合い始めたときのことである。悠斗はその時初めて喪失感というものを味わった。それまで当然にしていた彼女との登下校や休日の遊びなどが、いかに悠斗の人生の重要な部分を構成していたか、ということを感じた。

幸い　と言えるのはあくまで悠斗サイドの話であるが　葉月とその彼との付き合いは一ヶ月とちょっとで終わったようだった。葉月の傷心が癒えるのを待って告白しよう、と意気込んだ悠斗だったが、いつの間にかやたら一年が過ぎようとしている。失恋に傷ついたガラスの心が癒えるには膨大な時間がかかるのだ、と自分の小心を誤魔化して、ずるずると告白を延ばした先にあつたのが今日という日である。

絶対に今日、告白する。

Xデーに今日の日を選んだのは、始業式の日で「キリ」がいいからという下らない理由であった。逆に言えば、その下らなさに頼らなければならぬくらいに彼が弱気だったということである。葉月が自分に気があるかどうかはさっぱり分からなかったのだ。朝起きしに来てくれるあたり嫌われていないと思うが、その情が幼なじみに向けられたものか、それとも男の子に向けられたものかは判然としなかった。

悠斗はため息をついた。今日は完璧な一日にしようと思っていた。朝早く起きてこちらから葉月の家まで彼女を迎えに行く。新しいクラスできちつと自己紹介をして、校門のところで葉月を待つ。そ

れらが上手くいけば告白も成功するような気がしていたのである。臆病な彼の一種の願掛けだった。

昨日、早く寝られてたらなあ。

昨夜は今日の告白のことを思って緊張し、遅くまで寝付けなかったのだった。願も破れたことだし、告白は明日にしたほうがいいかな、という逃げの気持ちに心が湧いた。悠斗は、ぶんぶんと首を横に振って、正気を保った。明日でいい、という逃げの一手を三百手くらい繰り返して、今日に至り、さすがに同じ手を打つのにうんざりする気持ちが芽生えてきていた。

絶対に今日する。

「何を？」

心の中でもう一度固めた決意が口から漏れていたらしい。

横から不意にかけられた疑問の声に、うわ、と悠斗はまともに驚いた。乱れた呼吸を直す悠斗に、

「さつきからさあ、何、難しい顔してるの？」

と葉月の探るような顔が近い。

悠斗は顔をそむけた。そむけた方に回りこむ少女。

「ねえ？」

悠斗の顔が今度は逆方向に向く。

「ねえって？」

再び回り込む葉月から、三度顔をそむける悠斗。

通りを横切るときに車を警戒する子どものように、右左右、を繰り返す悠斗に、葉月は呆れたような顔を作った。

「何か悩んでることがあるならさ、相談しなよ」

それができたら、そもそも悩まないんです。

見当違いの思いやりの言葉に、内心ため息をつきながらも、悠斗は意を決したような顔で、

「じゃあ、ハツキ。今日、一緒に帰ってくれませんか？　そこで話しますので」

幼馴染みの言葉に甘えるような応対をした。

「そんなこと、何も改まらなくてもさ。いつも一緒に帰ってるじゃん」

「でも、ここ二週間は帰ってませんから」

「それは春休みだったからでしょ。揚げ足取らないでよ」

葉月が承諾してくれて、ちよつとほつとする悠斗。今日彼女に何か予定があつたら、計画は根底から崩壊していたところだ。

まだボクには運があるんだ。

学校が見えてきていた。

自分の計画性の無さを幸運にすりかえながら、悠斗は葉月を隣にして、他の制服姿の少年少女に混ざって校門をくぐり抜けた。

第2話：為された告白

校舎に向かつて緩やかに傾斜する坂を上ると、ひらひらと白い花びらが春風を泳いでいた。桜はまだ蕾を膨らませているところであるので、梅であろう。校内のものではなく、学校の近隣の家からの訪問である。どこからか可愛らしい声で鶯も鳴いて、悠斗は少し気分が明るくなるのを覚えた。

しかし、それが続いたのは生徒用玄関までの話だった。

校舎に入るためには、生徒用玄関で下足を履き替えなければならぬ。その生徒用玄関の脇に立つ掲示板に生徒たちが集まっている。新学年のクラス割りを確かめているのだ。気楽な気持ちで彼らに加わった悠斗の顔色は間もなく暗色に改まった。

「残念だね。別々のクラスになっちゃってさ」

横に立つてからりとそんなことを言う少女に、悠斗は自分のシヨックを分けてやりたかった。二人で分けて半分ずつにすれば、なんとか今日一日くらいなら乗り切れるかもしれない。

「返って良かったかもね。同じクラスだと、ユウト、あたしとばっか話してるからさ。新しい出会いが作れないじゃない」

半分になるところか倍になるほどの精神的打撃を受けた悠斗は、その場から一步も動けなくなった。思わず、

「ハツキはボクと離れても平気なんですか？」

と言つてやりたくなつたが、そんな告白めいたことが言えるくらいであれば世話はない。シヨックで足が地と同化したような悠斗に、「じゃ、放課後にね」

という別れの言葉を残して、葉月は目にした友だちに挨拶しに行つた。つれない幼馴染みを見送ることしかできない悠斗がしょんぼりと立ち尽くしていると、少しして後ろから肩がつかまれるのを感じた。

「よお、ユウト。オレ達、また同じクラスだな」

振り返った悠斗の哀愁漂う表情に、うお、と身をのけぞらせたのは昨年のクラスメートである。ひよろりとした体型の彼は、伸ばした前髪の下から悠斗を見下ろしてきた。

「何かあったのか？」

悠斗は、頭一つ分高い位置を見上げると、いいえ、としおれた声を出した。

「お前、大丈夫か？」

心配されてもそれで傷心が癒えるわけでもない悠斗は仕方なく歩き出した。

「さつきクラス割り見たらさあ、うちのクラス結構可愛いヤツ多いぞ。坂木とか加藤とかさ、あとは三谷とか。オレの美少女データブックに載ってるヤツラばっかだよ」

落ち込んだ中学生男子の気分を高揚させるのに相応しいと思ったのか、単に自分の趣味かは分からないが、明るい声を出してそんなことを言い出した彼に、

「美少女データブックって何ですか、池田くん？」

反応した悠斗には、元クラスメートのよしみで、という義務感しかない。

「この学校の美少女のデータが記載されたメモだよ。入ってる部活とか性格、血液型、好みの男のタイプとかさ」

「そんなのいつ収集してたんですか？」

「ふ、よくぞ聞いてくれた。地道にこつこつ去年一年かけてやってたのさ」

「……そこにハツキも入ってますか？」

「根岸？ 当然だろ」

のほほんとした顔に、悠斗は軽蔑の視線を与えた。ぎよっとする池田。

「おい、どうしたんだよ？」

上靴に履き替えようとすると、悠斗は冷たい声を投げた。

「今をもっともうボクには話しかけないでください」

いきなりの絶交宣言にたじろいだ池田少年は、

「待て待て。分かったよ。データブックから根岸は除いておく。それでいいだろ？」

恋愛よりも友情を優先する素振りを見せた。悠斗は、どうでしょう、とそっけなく答えた。

「おい、まさかデータを全部消去しろなんて言うんじゃないよな。

オレはこのデータを集めるために一年かけたんだぞ」

「それで？」

悠斗の隣を歩きながら池田は分からない顔を作った。

「その一年かけて集めたデータを使って、誰かに告白とかするんですか？」

悠斗が言葉を足すと、

「いやいや、そんな。オレなんか告白したって無理だろ」

と淡い諦観に卑屈な調子が混ぜられた答えが返ってきた。

「告白しないんだったらデータなんか集めたって仕方ないじゃないですか」

それを言える立場に無いことを悟るのに時を要さなかった悠斗は、言いすぎを謝ったが、

「あとでそのブック見せてください。ハツキのデータ処分しますから」

ということだけは念を押しておいた。

教室に入った悠斗は、教卓の上に置かれていた席順の紙に自分の席を教えてもらった。池田少年がしきりに、クラス内の美少女を觀賞しようぜ、と誘ってきたが、丁重に断った。葉月のいないクラスである。他にどんな美少女がようと興味がない。

こうなったら、どうしても今日ちゃんと告白しないと。

別のクラスになってしまっただけで会える時間が減ったからには、余計に絆を深めておく必要がある。しかし、である。担任の主催するホームルームや校長の開く始業式を適当に流しながら、頭の中で告白の場面をシミュレーションしてみたのだがどうにももうまくないのだ

った。

まず、どういう言葉で伝えるか、ということである。

「ずっと好きでした。付き合ってください」

十年來の想いを伝えるには普通すぎるような気がする。

頬を紅潮させる悠斗の前で笑い出す葉月。

ボツ。

「幼馴染みからカノジョになってください」

告白を境にというのは急すぎるような気がする。

真剣な目をする悠斗を見て呆気に取られる葉月。

ボツ。

「これから毎朝起こしに来てくれませんか」

婉曲すぎる上になんかズレてるような気がする。

冗談ほくほそりと口にする悠斗に、自分で起きなよ、とそっけな

い葉月。

ボツ。

「結婚してください」

論外。

次に、どのタイミングで言えばよいのか、という点。

待ち合わせた校門で言うべきか？ 人の目があつてとても無理で

ある。

帰り道で歩きながらか？ 歩きながらする告白というのもどうな

のか。

自分の家の前では？ 断られてもすぐに家に逃げ込めるといっ

げ腰の気持ちが見える。

いっそ自分の部屋では？ 逃げ場はないが、万が一の場合、これ

は気まずすぎる話になる。

どうすればいいんだ？

考えを進めているうちに、悠斗は、いかに自分が告白というものを真剣に考えていなかったか、ということを理解した。悠斗にとつての告白は甘い幻想の中にあつて、厳しい現実の像を伴っていないか

ったのである。伸ばし伸ばしにしてきた告白の時を今日の日に定め、一応告白相手の女の子と会う約束もした。今まで逃げてきた彼からすれば、それは長足の進歩といえるかもしれないが、それを称えることができるのは自分だけにすぎない。

「あーあ、というため息が押さえ切れない悠斗。前途は暗澹としていた。」

始業式と新入生を歓迎する会を済ませ新しい教室に返った悠斗の心はなお真つ暗だった。帰りのホームルームを済ませればあともう帰るだけになってしまった現状でも、告白に関しては何も決まっていない。

「お前、ホント、大丈夫か？」

ホームルームが始まるまでのちよつとした空白時間に、心配そうな顔をして話しかけてくる池田少年。悠斗は彼に一縷の望みをかけた。つまり、それだけ絶望的な状態だったということである。

「池田くんのデータブックによると、女の子はどういう告白のされ方が嬉しいんですか？」

「え、お前、誰かに告白すんの？」

がやがやとしている教室内であったが、告白、という激烈な言葉に耳ざとい何人かの視線が集まった。悠斗は気にもしなかった。どうせ今日告白すれば、悠斗が告白したという事実は数日中に二年の全クラスに知れ渡るのである。いかなる情報網が敷かれているのか分からないが、恋に関する話が伝わるのは恐ろしく速い。

「自分の気持ちを正直に伝えるっていうのが一番ポイント高いな。クールな振りしたり、おどおどしたり、冗談みたいなのはダメ。メールもNG」

悠斗は初めて友人の価値というものを発見した思いだった。感謝の意を込めて彼を見る目が気持ちが悪かったのか、池田は後ずさるような振りをした。

「お、おい、お前、まさかと思うけど……オレに告白するつもりじゃ……」

「どつという誤解ですか」

「いや、そんな熱い視線で見るからさ。一応言っておくが、オレはノーマルだからな」

「ボクもそうです」

池田はほつとしたような顔をしてから、しかもう一度まじまじと悠斗を見て、

「まあ、でも、お前に告白されたら、ちょっと考えるかもな」

と気持ちの悪いことを言い出した。

「お前、オレのデータブックに入れてやろうか？」

悠斗は、友人を軽く睨みつける格好をして、彼を退散させた。

最後の冗談は頂けなかったが、池田少年には感謝したい悠斗だった。彼のおかげで少し気が軽くなった。自分の想いを正直に伝えて、そのあとはもう葉月に任せれば良い。よくよく考えれば、自分より精神的に大人な彼女のことだ。YESであれ、NOであれ、上手に処理してくれるに違いない。経験済みのことであるし。

悠斗の首ががっくりとうなだれた。余計なことまで考えてしまった。そうだった。葉月は男子から告白されて付き合った経験があるのだった。

もしかしたら比較されるかも。

と考えた途端にまたぞろ恐怖がぶり返してきた。池田少年が施してくれた治療の効果は早々に切れた。悠斗の臆病は筋金入りである。葉月がそんな薄情な子でないということは十分に分かっていたが、悠斗の告白を聞いた葉月が前に受けた告白と比較して失笑している図が、悠斗の心中に浮かんだ。悠斗のたどたどしい告白を聞いて、彼女はきよとんとしたあとに、苦笑しながら鷹揚にうなづくのである。悠斗の背に嫌な汗が流れた。そんなことになるくらいなら断られた方がまだマシである。

「佐々木くん」

帰りのホームルームが終わり、尽きない悩みに押しつぶされる形でなかなか立ち上がれない悠斗に、遠慮がちにかけられる声があっ

た。

女の子の声である。

振り向いた先にほっそりとした手が差し出されていた。光沢を帯びた艶やかな手。その手の持ち主を見上げた悠斗の顔が光に照らされた。白光の中に一人の少女の姿がある。その瞬間、心にある一切のことが消えて、

天使だ。

という感動だけが、悠斗の心に残った唯一のものだった。

触れたら落ちそうな華奢な体に、繊細な首筋があつて、とがった顎先、その上で微笑みを作る花顔。柔和さを表すように緩やかに力いづいた眉のその下に切れ長の目があつて、その夜色の瞳が悠斗に優しく向けられていた。

ふっと周囲の景色が薄れた。

視界の中心に彼女がいて、その余のものが急速に遠ざかったように見えた。

不意に体の中から大きな音が立て続けに起こって悠斗はびっくりした。心臓が激しく鼓動する音だった。

「三谷志保シホです。斜め後ろの席の」

彼女の声が、悠斗の耳にはつきりと響いた。初夏に鳴る風鈴のような涼やかな声音。

朝から自分の殻に閉じこもっていた悠斗は、彼女がすぐ近くの席であるということなど知りもしなかった。

「あの……佐々木くん？」

差し出した手をそのまま引っ込めるわけにもいかず困ったような顔をしている志保に、はっとした悠斗は椅子を蹴って立ち上がった。相手に応じて差し出す手が自分のものではないようで、どうにもぎこちない。

「一年間よろしくね」

少女の滑らかな手に触れたときに、悠斗は口を開いた。もちろん、こちらこそよろしく、と挨拶を返そうとしたのである。しかし、

「好きです。付き合ってください」

その口から出たのは、彼の意志を大きく裏切る言葉だった。

古来より言葉には不思議な力が宿るとされる。悠斗の言葉にも魔法の力が込められていた。

梅花舞う麗らかな春の一日が、彼の言葉で一瞬にして凍りついた。二人の近くのクラスメートたちが氷像と化すと、その氷の魔法は、波紋のように同心円状に効力を及ぼして、教室の隅々にまで広がっていった。

教室全体が死のような沈黙に包まれたあと、

何を言っただあああ、ボクは！

悠斗は心の中で絶叫した。

なぜこんなことを口走ったのか、ということは彼の頭には無い。そんなことより言ったこと自体が問題であった。今日初めて会った子に、しかも教室内という公共的な場所でかける言葉にしては、あまりにも慎みが足りない言葉。顔から血の気が引くのが分かる気がした。端的に終わりである。おしまいである。始業式の日に面識のない子に満座の前で告白し、そして当然に振られた愚かな男としてこの一年間彼は敬意をもたれることだろう。

周囲の雰囲気どころか、自分の心まで冷え冷えとしてきたのを感じた悠斗の目に、告白を受けた少女の薄紅色の唇が静かに動くのが見えた。

「ありがとうございます。でも急だから一日考えさせてください」

凍れる時をいっぺんに溶かすほど彼女の声には温かみがあった。

聞きなれぬ方言でも聞いたかのような気持ちで悠斗が少女の顔を見ると、彼女はその長い睫毛を伏せて恥ずかしそうな様子であった。

えええええーっ！

声にならない絶叫しか上げられない悠斗の代わりはクラスメートがしてくれた。

氷像から人に戻った彼らは、教室中を震わせる声で喝采を上げ、それはしばらくの間続いたのだった。

第3話：告白の後

告白劇の余韻に浸る観客を置いて、主演の少年はダッシュで教室を出た。廊下を走りながら、何であんなことをしてしまったのか、考える余裕はまだない。ともかくも今は一人になりたかった。誰の目も届かない所で落ち着きたい。

生徒用玄関に至ると周囲の人影は少なめである。どうやら悠斗ユウトのクラスは他に先んじて帰りのホームルームを終えたようである。靴を履き替えるためにいったん止まった悠斗の足は再び駆け出した。軽快にコンクリートを蹴る。校門を通り抜けるときにも、彼の足はスピードを落さなかった。その門から本来なら純愛ストーリーが始まるはずだったのだが、始まる前にあっさりと終わってしまった。別の子に告白してからヒロインに告白する純愛など聞いたこともない。

ちらほらと歩いていた制服姿の少年少女たちも、悠斗が学校前の下り坂を駆け下りた辺りで見えなくなった。そこで、息が切れたこともあつて、悠斗は走るのをやめた。歩きながら呼吸を整えていると、幾分頭が落ち着いてきたが、なぜあんなことをしたのかはさっぱり分からなかった。葉月ハツキへの告白のことを考えすぎて異常な心理状態だったゆえと思いたいが、それは違うようである。というのも、志保シホのことを思うといっただん落ち着いた動悸が再び速くなるのである。

俗に言う一目ぼれ？

落ち着かない気持ちから何とはなしに早足になりながら悠斗は考えた。仮に一目ぼれだったとしよう。しかし問題はそこに留まるものではない。もっと他の所にある。一目ぼれかどうかなどということより、葉月というものがあひながら志保に告白をしたという不実さ、その変心の速さである。これまで幼馴染み一筋であった純真な少年が一拳に、二心を持つるくでもない男になってしまった。

うつらかな春の日に頭をかきむしりながら歩く悠斗を、すれ違ふ人々は憐みが混ざった目で見ていた。

「どうすればいいんだ、ボクは……」

告白を撤回できれば良いのだろうが、困ったことに撤回したいという気持ちが全くないのだった。むしろ、「考える」と言って彼女に期待をしているくらいなのである。さらに言えば、ちょっと恥ずかしそうにしてくれていたあたりに希望があるような……。悠斗は、ぴしゃりと両手で頬を打つと正気を取り戻そうとした。

きつとボクのことを可愛そうに思ってくれたんだ。

というのが志保の寛大な回答に対する悠斗の解釈だった。クラスメートの前で唐突に告白した上にあっさりと玉砕したのでは、ラブストーリーの間抜けな脇役にもなれはしない。せいぜいが喜劇のピエロである。思春期に恋物語より喜劇に参加したい少年などどのくらいいるだろうか。その辺の少年心理を汲んでくれたのであると、悠斗は推論した。悠斗の告白を明日断るにしても、考える時間を取ることで、悠斗の面目を保ってくれたのである。

何ていい子なんだろう。

恋の矢を受けた者に正気を期待することは不可能である。その矢の矢じりには幻想を引き起こす薬が塗られている。悠斗は自分で作り上げた幻の志保に感謝の念を捧げていた。

携帯電話が着信を告げたのは、それからしばらくしてのことである。

「今どこなの、ユウト?」

肩下げタイプの学校指定鞆から取り出した携帯が不機嫌な声を流した。幼馴染みの声である。

「ずっと、もうかれこれ三十分くらい校門で待ってるんですけど。あなたのクラスは終わってるんでしょ?」

悠斗は自分の迂闊さに内心で舌打ちした。自分の仕出かしたことで頭が一杯で、今日葉月と一緒に帰る予定だったことをころっと忘れていたのである。

「どこにいるのって聞いてるんだけど」

即答しない悠斗にピンとくるものがあつたのだろう、少女の声が苛立ちを帯び始めた。

「怒らないでくださいね」

「怒られることなの？」

調子の良いことを言ってしまったことを恥じ入った悠斗は、携帯に向かつて、今から戻ります、と言ってから、謝った。

「謝らなくていいからさ。今どこにいるのか言いなさい」

悠斗は、小さく息を吸うと、勇気を吐き出した。

「もうすぐ家に着きます」

切れた電話を悠斗は所在なげに見つめた。かけ直して改めて謝った方が良いか、考えている時間は長くなかった。

「事情聞きたし。家で待て」

すぐに葉月からメールが来た。

「いや、とうとうユウトくんも告白ですか。やっと男の子になつたね。うん、お姉さんは嬉しい。それも、皆の前で、堂々と。しかも、あの美人で有名な三谷さんにさあ。ま、十中八九さ、ダメだと思つよ。ぶつちやけちゃうとね。でも、結果なんてどうでもいいじゃない。まずは過程でしょ。たとえ失恋してもさ、それを肥やしにして次の恋の実を結べばいいのよ。今、あたし、うまいこと言つた？ あ、言つてない？ ま、どーでもいいわ、そんなこと」

やたらとテンションが高い葉月を、一歩引いたところから悠斗は見ている。

悠斗の部屋である。

家に入り二十分ほどすると、覚悟を握り締めて幼馴染みを待つ悠斗のもとに、葉月が駆け込んできた。先ほどの非情な仕業につき釈明を求められ、いやいやながら話した今日の恋話に対する葉月の反応は、軽快なものであった。置いてきぼりにされて悪くなった機嫌もすっかり治ってしまった

悠斗の密かな期待として、葉月が嫉妬してくれるのではないかという思いがあつたのだが、彼女は嫉妬の「し」の字も見せなかつたところか、

「ユウトくんの初恋だもんね。あたし、応援する。ユウト私設応援団の応援団長になる」

などと拳を天高く突き上げる始末。悠斗の気分は、フローリングの床を突き抜けそうなほど、重くなった。しかし、一方で、志保への告白は葉月に嫉妬させるためにしたことなどではないのだから、嫉妬してもらいたいという期待を葉月に寄せること自体が間違いなのである。間違つたことを平気で願つてしまふ自分にも嫌気が差してくる悠斗。

「そんな落ち込むことないじゃない。絶対にフラれるって決まつたわけでなし。もしかしたらつてこともあるよ。あんなに綺麗なのにカレシいたことないみたいだし」

暗い顔をした悠斗の心情を誤解した葉月が、しかし、微妙に励ましになっていないことを告げてきた。これまでカレシを作らなかつたのだから、悠斗の告白を受け入れてくれる可能性もまた少ないだろう。

「一年生のときに人気のある男子から結構告白されたみたいだよ。

渡辺くんとか相馬くんとかさ」

「詳しいですね」

異性のことならともかく同性の恋愛事情にどうして詳しいのか、疑問を持った悠斗が訊いてみると、葉月は、ベッドの上に腰掛けた状態でやれやれと首を振つた。

「ある女の子にちゃんとしたカレシがいないとね、彼女に片想いする男の子ができるでしょ。可愛い子の場合、片想いする男の子の数も増える。そうすると、わたしたちのチャンスが減るといわけよ。だから、カレシを作らない可愛い子っていうのは要注意人物なの。常にチェックしてるんです」

悠斗は完全に自分のことを棚上げにした物言いをする少女を注意

してやった。葉月こそチエックされる側の子である、というのは幼馴染みの欲目ではない。友人のデータにもそうある。

「皆から憎まれてるかもしれないね、ハヅキは」

可愛いから、とそう続けた悠斗の目が訝しげに細められた。軽口ではあったが、人をけなすようなものではない。にもかかわらず、少女は俯いていた。いつまでも顔を上げない葉月を下から覗き込んだ悠斗ははっとした。

「ちょ、ちよつと、なにになに？ なにすんのよ、エッチ！」

彼女の額に手を当てた悠斗に、葉月はキツと強い目を向けた。

ポニーテールを左右に揺らして悠斗の手を払おうとする葉月に、

「ほつぺたが赤いから熱でもあるのかと思ったんです」

誤解を払う悠斗。

「な、ないわよ。熱なんて。そんなことより、気安く女の子に触るの、禁止っ！ 厳禁っ！ ダメ、絶対っ！」

「ハヅキだつてすぐ手とか握ってくるじゃないですか」

「そ、それとこれとは話が別。わたしからはいいけど、あんたからはダメ。いいわね？」

男女平等の理想世界に想いを馳せながらも、彼女の語勢の鋭さに悠斗はうなずくしかなかった。

葉月はベッドから立ち上がった。

「え、もう帰っちゃうんですか？」

「帰る。幼馴染みとは言え、カノジヨ持ちになる人の部屋にいるのもどーかって思うし」

「十中八九フラれるんじゃないんですか？」

「あの三谷さん相手に一、二割可能性があるなら上等でしょ。悠斗がいいヤツだつてこと、どこかで知ってくれてたら、もしかしたらね」

そんな可能性はないはずである。志保とは全く面識がないのだから。告白が今日ではなく、少し時間が経つてからだとしたら、いいヤツであることを見せることもできたかもしれないが。

「今日相談したいことってそれだったんでしょ。わたしに相談してくれてから告白しても良かったのにさ。ま、告白って何より勢いが大切だから、返って良かったかもしれないけど」

そう言って葉月が出て一人になった部屋で、悠斗はベッドの上に横になった。葉月の香りがした。悠斗は、今日の失敗は実は成功だったのではなからうか、と考えた。

ハヅキは全然ボクなんかに興味ないんだな。

ということに気がついたからである。悠斗の恋を応援するとまでいう少女に告白していたらどうなっていたのだろうか。今まで、想像の中の葉月の反応は全て優しいものだったが、現実には告白していたら、もしかしたら彼女は困惑したかもしれない。幼馴染みに告白されるといって思っても無い事態に側面を衝かれた彼女が、悠斗との関係を崩さないで保ってくれるかどうかは保証の限りではない。いやむしる関係はぎくしゃくしたものになるだろう。そんなことになるよりは、恋人同士になれなかったとしても、こうして気楽に話せる関係の方がまだマシかもしれない。

ボクは卑怯者です。

そういう思考の進め方に、志保に一目ぼれして、十年来の付き合いの葉月のことを一朝にして忘れた自分への言い訳が含まれていることを、悠斗は認めざるを得なかった。後先考えない向こう見ずに卑怯が加われば、どのくらい程度の低い人間になるのだろう。これまで、特別人様に恥じるようなことをしてこなかったという自負がある悠斗の胸に苦いものが広がった。

よし。明日、三谷さんにすぐに返事を聞いて、すっぱりと振ってもらう。

クラスメートにそれが伝わって嘲笑されればなお良い。

それが自分へのせめてもの罰だと思った。

第4話：予想外の結末

「よろしくお願いします」

朝の校門の前で、軽く下げられる黒髪のセミシヨート。

その頭が上がると、恥じらいの色を混ぜた、しかしまっすぐな視線が悠斗の目を見ていた。

いつものように葉月と登校した悠斗が、自分を呼ぶ声に応じたのがほんの一分前。

呼び止めたのが志保だったことには軽く驚いたが、その驚きはすぐに心の底へと沈んだ。わざわざ校門で待っていてくれた彼女の用件はもちろん決まっている。昨日の告白への答えである。悠斗の覚悟も決まっていた。処罰の宣告を受ける準備は万端整っている。どうせ断られるなら教室の中で派手にしてもらった方がいいのにと、まで開き直った気持ちでいる悠斗にかけられたのが先の言葉だった。葉月は気を利かせて、志保の姿を認めるや否や、彼女に軽く会釈して、その場から離れていた。

「あの、それってどういう……」

悠斗には何が何やらさっぱり分からない。一体何をよろしくすれば良いのかと、戸惑う少年に、志保は、

「昨日の告白を受けます。お付き合いしてください」とはつきりと言いつ直した。

悠斗の全身からへなへなと力が抜けた。

付き合ってくれる、と言う。

夢でなければ、悪い冗談だろう。初対面の男からの告白を受ける訳がない。「友だちからお願いします」ということであればまだしも、いきなり「好きです」と言われても困り果てるだけであろう。少なくとも自分だったならそうなる。仮に見も知らぬ女の子に告白されたとしたら困惑するしかない。例え、それが可愛い女の子の子だとしても、おそらくは変わらない。まして、悠斗は自分がかっこい

いなどと微塵も思っていないし、これは別に謙遜ではない。十三年生きてくれば、周囲からどういう評価を受けているかなどということは理解してしかるべき。

志保は顔を少し伏せて笑っていた。

「スゴい顔してるよ、佐々木くん」

「すみません。びっくりしてしまいました」

悠斗が正直に答えると、志保は、昨日は自分の方がびっくりさせられた、と軽く責めるような調子で告げた。それにも、

「すみません」

と答えるしかない悠斗。確かに昨日のことは迷惑だったに違いない。だからこそ、今日その罰を受けようと思っていたのである。

「もしかして、昨日の告白、冗談半分とかだったんですか？ 男の子ってよくそういうことするみたいだから。もしそうだったら……」

悠斗の戸惑いを誤解して眉宇を曇らせる志保に、悠斗は、違いますが、と自分でもびっくりするほど大きな声を出し、思わず通学途中の同級生の視線を集めた。

恥ずかしく思う悠斗に、志保はほっとしたような顔を作ると、

「じゃあ、よろしく願います」

そう言っただけのように手を差し出した。遠慮がちに指先を握ったときに、悠斗の胸から、どうして自分の告白を受けてくれたのかという疑念が消えて、はずむような喜びの気持ちしかなかった。

悠斗は、自分がいかに現金な人間であるか、初めて理解した。

悠斗と志保が付き合うことになったということは、瞬く間にクラス中に知れ渡ることとなった。触れ回ったわけではない。皆、昨日の告白劇の続きがどんなエンディングを迎えたのか知りたがって、悠斗と志保に聞きに来たのである。

「何でそういうことになっちゃうんだよ、ユウトくんよお」

エンディングを話した相手の一人である池田少年が、悠斗の机に顎を乗せて、恨めしそうな顔で、悠斗を見ていた。

「お前は絶対にこっち側の人間だと思つてたのによ」

顎ががたがたと机を揺らし、不気味な音を立てた。その音が、クラスの男子の心の琴線からも立てられていくことに、悠斗はすぐに気がついた。クラスの男子から、その日、悠斗は散々、嫉妬混じりの冷やかしを受けた。悠斗と志保ではとても釣り合わない、などという声が冷笑を伴つて聞こえてくる始末だった。それだけ、志保に人気があつたということである。池田データによると、学年でトップ3に入る美少女、ということだった。そんな子と一緒にクラスになって、さあ楽しい一年になる、と心弾ませていたところに、とりたてて目立つようでもない男が突然さらつていったら、憎悪の念も湧くというものである。

そんなこと言われてもなあ……。

確かに告白したのは悠斗だが、それを受けたのは志保なのである。なぜ受けてくれたのか、と聞きたい気持ちは、斜め後ろの席にいる彼女に目を向けると薄れてしまう。ちよつと振り返つて志保を見ると、屈託無く笑いかけてきてくれたり軽く手を振ってくれたりするのである。そのたびに鳴る胸の高鳴りが、疑問の声よりも大きく響くのだつた。

しかし

その疑問の声をとうとう無視できなくなるきつかけが、悠斗の告白が受け入れられてから三日後に起きた。昼休みに他クラスから訪問客があることを告げられた悠斗が、廊下に出ると、細身でハンサムな風貌の少年が立っていた。見知つた顔ではない。悠斗が用を尋ねると、彼はいきなり、

「お前、三谷と付き合つてるって、ホント？」

と探るような視線を向けてきた。唐突に失礼なことを訊く、とちよつと気に障る所はあつたが、少年にはどこか思い詰めたような色が見えて、悠斗が正直に答えてやると、彼はそれ以上は何も言わず踵を返した。

「あいつ、矢部だよ。確か一年の時に三谷に告白してフラれたはず

だな」

物見高く見物していた池田の解説で、今の彼の不可解な行動が理解できた。自分を振った相手でおそらく今でも気になってる女の子がどんな男をカレシに選んだのか、確認しに来たのである。確認して何を思っただろうか。

何でコイツなんか、って思われたな。

少年は最低限の礼儀を心得ているようで口に出しはしなかったが、悠斗を見る目に侮蔑の色が混ざっているようであった。悠斗は特に怒りを感じなかった。少年は、同性の悠斗から見ても魅力的な容姿を持っている。とすれば異性からでは尚更であり、彼は自分に自信を持っていたことだろう。その自信を明らかに格下の人間に打ち砕かれたのである。無念はいかばかりか、と冷静な目を向けることができる悠斗には、自分を卑下する気持ちがあるわけではない。悠斗自身もやはり疑問だっただけである。

「わたしが佐々木くんの告白を受けた理由？」

その日の家への帰路だった。新学期が始まったばかりで授業が終わるのは早く、まだまだ天高い位置に日がある。天上にいますものに劣らない輝きを持つ少女が隣から出す柔らかい声に、悠斗は、はい、とうなずいた。昨日から悠斗は志保と一緒に帰っている。どうやら志保の家への途上に悠斗の家があるらしく、志保から誘ってくれたのである。慎み深く顔を俯かせながら零こぼしてくれた、「一緒に帰ろう」という誘いの言葉に、悠斗の意識は天上世界までもっていかれた。そのあと、

男のボクから誘うべきだったのかな。

と思い直して、自己嫌悪に地下世界まで突き落とされはしたが、

小首を傾げる志保を見て、悠斗は、質問すべきではなかったか、と後悔の念がよぎった。しかし、その後悔はすぐに恐怖の思いに塗りつぶされた。志保が付き合ってくれるという幸運に恵まれた悠斗だったが、幸運に慣れぬ者は、それさえもが不運の始まりなのではないかというネガティブな思いを持つものである。これまでの人生

で大して運のよかったことがなかった悠斗は、矢部少年の訪問を受けたことも手伝って、その幸運の裏に何ごとかが隠されているのではないかと恐れ始めた。端的に言えば、

ボクはからかわれてるんじゃないか。

ということである。こんなに可愛らしい子が下心など持つはずがない、と思う一方で、それならなぜ自分なんかと付き合うのかというところが不可解なのだった。恋のキューピッドの矢に塗られた薬の副作用が出始めたのである。

悠斗は足を止めると、目を瞠^{みは}った。

ふと立ち止まった志保が悠斗から顔をそむけていた。その細い肩が小刻みに震えている。

悠斗の恐怖は再び後悔の色に塗りつぶされた。理由は判然としないうが、志保を傷つけてしまったのだ。自分の思慮の足りなさを呪った悠斗だったが、

「ああ、もうダメ。おつかしくて」
その必要がないということに気がつくのに大した時間はかからなかった。

志保は泣いていたわけではなかった。逆である。笑っていた。その小さな体をくの字にするようにしてお腹を抱えて大笑していたのである。

悠斗は再びショックを受けていた。

唐突に上がった笑声もさることながら、涙目を指でおさえながらこちらを見る少女の様子ががらりと変わっていたのである。柔らかなそんな華奢な体に一本芯が通ったかのように、彼女はすつくと立ってみせていた。薄紅を塗ったような艶のある唇には不敵な笑みがあった。ヒメユリのような清楚な雰囲気があった彼女が、いつの間にかヒマワリのような活発な空気をその身に纏っていた。

「だってさ、」どうして告白受けてくれたんですか『ってさあ、真面目な顔でそんなこと聞くからさ。付き合っただまだ三日だよ。そのうち、『ボクのどこが好きですか』とかって毎日しつこく聞かれる

よようになるのかなって思うと面白くて」

ツポにはまった理由を説明してくれていたが、それを悠斗は聞き流していた。もはやそんなことよりも、彼女の変貌振りの方が気になっていった。今まで、彼女を形容する時に、天使のような、という言葉に密かに使っていた悠斗だったが、このはしゃぎようは天使というイメージではない。

「根岸葉月さんよ」

鋭さを帯びた声が悠斗の問いに答えたが、それは小悪魔のものと
言って差し支えない内容だった。

「根岸葉月さん。わたし、あの人が学年で一番美人だと思ってるんだけど、その人がいつも一緒にいる男の子ってどんな子が興味があったのよ。だからあなたの告白を受けた。これで満足？」

「……それだけのことで？」

悠斗はがっかりするものを覚えながら、どこかで納得もしていた。やはり、悠斗自身に興味があったのではなく、他の存念があったのである。いまいち志保が語った理由が分からないが、そこまで突っ込む必要はなかった。自分に興味がないということが分かっただけで十分である。

「そっちが聞いたんだからね」

悠斗が軽く肩を落とすのを見て、けろりとした口調で言った志保は、

「わたしね、根岸さんのファンなんだよね。ファンであり、またライバルだと思ってる。まあ、勝手にだけど。学年でわたしの敵になれるのはあの人しかいないってね。去年の最後の定期テストは負けちゃったけど、次は勝つわ。あと、さっきは学年で一番可愛いつてゆったけど、それわたしを除いての話ね」

そう少し興奮したような口ぶりで続け、

「ところで、成績はともかくとしても、ルックスってのはなかなか争えないでしょ。コンテストがあるわけだし。だからさ……」

続く言葉の一太刀で、悠斗はぱっさりと斬りふされた。

「あなたを根岸さんと取り合ってみようかなって。あなたのこと好きにさせた方が、勝ちってことでね。それがちゃんとした理由よ」
斬り口が見事すぎたのか、悠斗はあまり心の痛みを覚えていなかった。志保の変身が鮮やか過ぎて、先ほどの少女と同一人物だとうまく納得できなかったこともある。しかも、一つ誤解があるようだ。彼女は、悠斗を葉月と取り合うと言ったが、取り合うも何も、
「葉月はボクのことを何とも思っていないんですけど」
という根本的なところを分かっていないようである。

志保は口元に微笑を煌かせると歩き出した。その隣に並ぶ悠斗に、
「わたしはそんなことないと思うけどね。根岸さんは、あなたのこと好きだと思う」

と確信ありげに言ったが、根拠は無いようである。

「無いつていうか。ま、女の勘かな。見れば分かるっていうか」
そう訂正した志保が、葉月と悠斗が一緒にいるところを何度か見たことがあることを明らかにした。

葉月が自分のことを好きだということをおどめであるとはいえ断定されて、しかし驚くべきことに、悠斗の心には何らの感慨も湧いてこないのだった。もちろん、嬉しいという気持ちはあるが、それは嫌われていないという意味でに過ぎない。もしこれが志保に告白する前に聞いていたことだとしたらどうだろう。葉月への告白に勇躍しただろうか。

そうかもしれないけど……。

いまや事情は変わってしまったのだ。つい三日前のことなのに、全ては遠い過去のことのように思われた。

「それでさ、今の話聞いて、わたしのこと嫌いになった？」
不思議なことに、いやそも恋とはそういうものかもしれないが、悠斗には志保への嫌悪感というものが全くなかった。冷静に話しかけ聞けば、それは人を勝負の道具にするがごとき行為であり、馬鹿にした話である。しかし、悠斗の心の中にあるのは残念な気持ちだけだった。隣からの問いに対して首を横に振った悠斗は、

「ボクのごときは好き嫌いとは関係ないですよね」

ぼそりと言った。悠斗は、言わば、サッカーにおけるボール、バドミントンにおけるシャトル、剣道における竹刀のようなものである。勝負をするための道具に過ぎない。道具に、愛着は持つても、愛情を抱く人間などいるだろうか。

志保は、ふふっ、と大人びた笑みを浮かべると、佐々木くんのごとは好きだよ、と優しい声を出した。

その綺麗な声に、悠斗の頭は一気に沸騰した。心の冷えた部分では、

からかわれてるだけだ。

ということを理解しているつもりなのだが、いかんせんその声に、悠斗の頭を冷やすほどのさめた所はなかった。加えて、志保が、

「みんなの前で告白してくれたのは嬉しかったよ」

と大人しい顔を一転させて、今度は照れたように頬を染めたので、そのチャームिंगな所作に心奪われ、心の声を聞くのは尚更無理な話となった。

熱くなった頭が考えられるのは、この翼を生やした少女と付き合いえるという事実がとりあえずは重要なのではないか、ということだった。一応告白を受け入れてくれた理由も分かったことであるし、それにそもそも、

ボクに三谷さんのことをどうこう言う資格があるのか。

ということに思い至ると、からかわれてるだけだとしても仕方がないような気がした。つまり、それは

「ところでさあ、佐々木くんこそ、どうしてわたしに告白してくれたの？ 話したこともなかったのにさ。なんか感動的な理由があるんでしょ？」

という志保の問いに対して、口がうまく開かないということであった。

付き合っただけまだ三日の初々しい中学生カップルにありがちな照れからの沈黙とはまた異質なものが、二人の間にしばらく落ちていた。

第5話：邂逅

志保^{シホ}と別れ、家に入った悠斗^{ユウト}は、ほっと息をついた。彼女と一緒にいるのは楽しいには違いないのだが、同時に緊張もする。変なことを言ったらマズいと気を遣うのである。今日はどうだったかと振り返ってみると、どうだろう、大過ないような気はするのだが。

正直に言わなかった方が良かったかな。

気になる所があるとすれば、志保にありのまま答えた告白理由の件だった。「一目惚れでした」と答えたとき、さすがに彼女は呆気に取られていたのだった。

「一目惚れしたその瞬間に告白するなんて、積極的にもほどがあるんじゃないの？」

他に存念があるのではないのか、と彼女の目が怪しみの色を浮かべた。確かに、自分でも行き過ぎた行動だったとは思うが、初めての経験だったわけでもいかんともしがたいものがある。その辺のことを、何度か説明すると、志保はうるさそうに片手をストップという構えにして向けてきた。

「もういいわ。本当は、『入学式のとくに一目見てから一年間ずっと好きでした』的な方がロマンチックだけどさ。まあ、現実なんてそんなもんかもね」

理想と現実のギャップについては、悠斗にも意見がある。三日間の理想的な恋の日々は過ぎて、あとに残ったのはいつまで続くか分からない現実。いったい志保は、「悠斗取り合いゲーム」とやらをどのくらい継続する気なのだろうか。

「さあ、それはわたしにも分からないな。葉月^{ハツキ}さんの都合もあるし。勝負をつけるまえに、わたしがあなたに飽きるかもしれないし、逆にあなたがわたしに飽きるかもしれない。先のことは誰にも分からない」

志保の声はどこまでもさっぱりとしていた。悠斗を葉月と取り合

いたいなどと剣呑なことを言う割りには、所作に陰険な所がない。そういう所に好感を持っていて悠斗は、しかし、

それも好きだからなのか。

と疑う気持ちもあるのだった。好きという感情に向かつて、彼女の全ての行為がプラスの価値を帯びて収斂しゅうれんされていくのだろうか。考えてみると空恐ろしいことである。好きだから、志保の行為が全て良く見えるというのは。翻ひるがえつて、好意的な行為の積み重ねが好意を生む場合もあって、その好例が葉月だった。いつから葉月に好意を持っていたのかは覚えていないが、どこが好きなのかと問われれば、それに対する答えはいくらでも挙げられる。まっすぐなところ、物事に一生懸命に取り組むところ、思いやりがあるところ、はきはきしているところ、寛大なところ、などなど。美質はいくらでも挙げられ、その美質が集まった人格に香気を感じるのである。

葉月とはこの三日間携帯電話でしかやり取りしていなかった。志保が告白を受けてくれたことを彼女に知らせると、自分のことのように狂喜してくれて、そのあと、

「じゃあ、これから一緒に登下校はやめた方がいいね。会うのも

と勧告してきたのだった。志保に悪い、というのである。

「三谷さんついていかにも女の子って感じですか……あ、これいい意味でね。女の子は傷つきやすいんだから」

「そんなんでもないみたいなんですけど」

「どういうこと？」

一瞬、悠斗は志保の変貌振りを話しているものか迷った。カノジヨとのプライベートなことを幼馴染みとはいえ他の女の子に話しているものだろうか。悠斗の逡巡を気にせずに、葉月は続けた。

「仮に三谷さんがあんまり気にしなくてもさ、良くないと思うよ。

付き合ってる人がいるのに、他の女の子と仲良くするっていうのはさ。誠実じゃないし、それに最悪、二股疑惑とかにもなるし」

「でも、ハツキのときは、ボクに話しかけてくれてたじゃないですか」

一年生のとき、葉月が他の男の子と付き合っていた時でも、彼女は普通に悠斗に接してくれていた。

「カレシができたからって、幼馴染みにいきなり話しかけなくなるなんてさ、どーいうの、ソレ？ 感じ悪いでしょ」

というのが彼女の言い分だった。

「ソレはそれ、コレはこれよ。男の子と女の子じゃ違うのよ」

どこが違うのか、とは聞かなかった。葉月には男女の平等という観念はない。それよりも聞いてみたいことがあった。

「ハヅキはボクと会わなくても平気なんですか？」

始業式の日には訊けなかった言葉がすらりと喉から滑り出たのは、あの時とは状況が違うからだだった。葉月の気を引きたいという下心ではなく、純粹な興味からの言葉である。しばらくの沈黙が続くうちに、もしかしたら葉月に誤解させてしまったか、という怖れが悠斗の胸に現れた。しかし、その心配はなかったようだ。

「うーん、平気じゃないけどさ。あんたの初恋なんだから、邪魔したくないのよ」

そう答えた彼女の声はいつもの明るいものだった。

葉月との話を終え携帯を切った悠斗は、腰掛けていたベッドに横になった。葉月のことを考えると胸が痛んだ。悠斗に遠慮してくれているという彼女の思いやりについてもそうなのだが、それよりも問題は、あれほど好きだった彼女からあっさりと翻意して志保と付き合った途端、彼女を省みなくなった自分の浅ましさである。この三日間は志保のことで頭が一杯になり、葉月のことはほとんど考えなかった。それでいて、今の電話のやり取りから、やはり葉月のことが好きだということを確認もしていた。ただ、葉月に向ける気持ちと、志保に向ける気持ちには質的な違いがあった。

それは例えば、葉月と話すと安心感を感じるのに対して、

「明日はお弁当を持ってく日ですが、佐々木くんの分はわたしが作っていきますので、お楽しみに」

という志保からのメールに、内容よりも、メールをしてくれたと

いうそのことに、体の奥の方が温まって幸福感に満ちるというその違いだった。

翌朝、ダイニングで朝食を取っていた悠斗の所に、母が妙な表情をして帰ってきた。「帰って」というのは、今しがた鳴った呼び鈴に応えて玄関に出ていたからである。

「悠斗、三谷さんっておっしゃる女の子が迎えに来てるけど」

麦茶を吹き出しそうになった悠斗が、慌てて玄関に向かうと、うなじまでのセミショートを朝日に輝かせた可憐な少女が、恥ずかしげにもじもじとした様子で立っていた。

「一緒に登校しようかなって思って……迷惑でしたか？」

そうぼそぼそと上目遣いで言う彼女に、一分だけ待つように告げると、悠斗は洗面台で入念に歯を磨いて、寝癖を直し、目やにがついていないか確認した。弁当のことは聞いていたが、今朝迎えに来るなどということは聞いていない。とはいえ嬉しい驚きに、胸をときめかせながら、身支度を整えて玄関に向かうと、

「……まあ、悠斗とお付き合いを？ ふつつかな子ですが、よろしくお願いします」

などという言葉を母からかけられて、憤ましやかに顔を伏せている志保の姿が目映った。伏せた顔の下でどんな目をしているのか、悠斗には分かる気がした。そして、事実その通りだった。

「びっくりした？」

息子の成長を見る生温かい目に送られて、家を出て少し歩くと、隣の少女が面白そうな口調で言ってきた。びっくりさせるつもりで昨夜メールしなかったのだろう、と悠斗が返すと、

「ごめんね。もしかして迷惑だったかな。わたしのこと、お母さんに言っただけだったみたいだし」

と寂しそうに声を落とした。悠斗が焦って否定すると、少女の花顔にかかった憂いの霧はあっけなく晴れた。晴れた表情に人の悪い笑みがのる。悠斗は、一瞬だけ彼女の非道を誹りたくなるのだが、

からかわれること自体に嬉しい気持ちがあつて、どうしようもないところである。

優しい春の朝だった。

行く道が輝いているように見えるのは、雲一つ無い青空のおかげもあるかもしれないが、それだけではない。隣を歩く悠斗より少しだけ低い背の少女から発せられる光で、周囲のものがあまねく照らされるからである。その清かな光は、道行く通行人や制服姿の目を引きつけるとともに、肩先が触れそうなところでそれを浴びている悠斗にはまた別の作用を及ぼしている。

「もしもーし、聞こえてますか？」

はつとした悠斗がぼおつとしていたことが分かった志保は、

「あーあ、アレですか。付き合い始めて四日目にして倦怠期ですか」
やれやれと首を振った。

「わたしの話を聞かないで、昨日のサッカーの結果でも考えてたんでしょ。それとも野球？」

悠斗は、家の夕食時によく母が父に言っているようなことを言う所帯じみた少女の誤解を解こうとした。確かに聞いてはいなかったが、それは悠斗の責任というよりは、志保自身の責任だと言える。彼女の一挙手一投足に抗い難い魅力があつて、時に我を忘れてしまふほど見入ってしまうのである。魅入られるというほうが正しい。

「一つお聞きしたいことがあるんですが」

少女の追及をかわすために、悠斗は全然別のことを口にした。誤魔化しを非難する鋭い視線に耐えながら訊いたことは、なぜ悠斗に接する時と他の人と接する時では態度が違うのかということだった。「気になる？」

実はそこまで気になっていたわけではない。クラスメートに対してや先ほど玄関先で母に対していたときのような大人しい所作の志保も魅力的だったが、悠斗に対しているときの奔放な志保も同じくらい魅力的だった。悠斗にしてみればどちらの彼女でも構わない。とはいえ、昨日はその変貌振りに驚かされたことであるし、今は自

分への非難から注意を逸らせそうでもあるしということ、悠斗が力強くうなづく、

「本当に親しい人にだけは地を見せることにしてるのよ」

そう言つて片目をつぶつてみせた。彼女の瞳にこもる魔力で、悠斗の心臓が跳ね上がった。二、三度それをやられたら路上で石像と化す恐れを感じた悠斗は、視線を前に向けた。視界に見知つた後姿が入る。悠斗たちと同じ肩掛けタイプの鞆を下げて歩く姿勢の良い姿。頭の上の方できつちりとまとまったポニーテール。

「あれって根岸さんじゃないの？」

横からの小声の囁きに、悠斗は驚いて志保に視線を向けた。

「よく分かりますね」

「ファンだから」

そう言つて志保はにこりと口角を上げた。付き合っているカノジヨの微笑に嫌な予感を覚えるというのも尋常な話ではなかるうが、

「紹介してよ、わたしのこと」と志保の無邪気な声がして、悠斗は自分の予感が当たっていたことを確認した。

「どうすればいいんですか？」

「この人と結婚するから君とはもう付き合えないんだ、とか何とかさ」

「……普通でいいですか？」

「分かつてるなら聞くことないでしょ。さあ、行こう」

悠斗は足を速めると、葉月、と近づいて声をかけた。振り返つた葉月の顔の喜色が戸惑いの色に変わったのは一瞬だけのことだった。悠斗はあいさつしたあとに、

「三谷志保さんです」

と少し離れたところに所在なげに立っている少女に手を向けた。

志保は、初めまして、と言つてしおらしく頭を下げた。先ほどまでの傲慢なところは影を潜め、奥ゆかしい風情に包まれている。数秒後、キャツという可愛らしい声が志保の口から上がったのは、

「ありがとっ、三谷さん。悠斗の告白受けてくれて」

勢い込んで言う葉月のせいだった。彼女は、悠斗の横をすりぬけて、志保の手をがしっと握り締めると、驚きに目を瞠る志保に、

「幼馴染みの視点からは、いい子ですから、悠斗は。わたしが言うことじゃないだろうけど、できれば長く付き合っただけでいいから、と力を入れて言うと、二人の邪魔をする気はないことを告げて、

小走りに通学路を駆けていった。

「あの胸が羨ましいな」

立ち去る葉月の後姿を見ながら、突然に脈絡の無いことを言い出す志保。悠斗は目を合わせないようにしたが、志保は、そう思うでしょ、と悠斗の制服の袖を引っ張ってきた。

「ボクは別に羨ましくありません」

「でも大きい方が好きなんでしょ、男の子って」

付き合い始めて四日目のカップルが話すこととしてはロマンチックすぎて、悠斗は目まいがしてきた。どーなの、と迫る志保のその胸元に落ちそうになった視線を、悠斗は慌てて逸らした。

「む、胸のことなんかより、今で分かったと思いますけど、葉月はボクのこと何とも思っていないです」

「どうかな。女の子ってね、外だけじゃなくて、内も繕うものなのよ。心にも化粧をするんだから」

納得しない様子の志保のその言葉は、悠斗にとって納得のいくものだった。

「経験があるの、佐々木くん？」

「今まさに」

「素は不細工だって言いたいよね。わたしのこと嫌いなんだ」

好きです、と真剣な口調で反射的に答えた刹那、悠斗は後悔したが、くすくすと抑え切れ無い様子で笑い出す志保を見ると、その後悔の念はすぐに消えるのだった。

第6話：戦場へ

オレンジ色のハートが悠斗^{ユウト}の視界に飛び込んでくると、同時に周囲の空気が震えた。おお、という低い感嘆の声が上がっている。昼休みである。グループ毎に机を合わせて一つのダイニングテーブルとなし、各人食事を取っている。そのテーブルの一つに、人だかりができており、中心に悠斗がいた。悠斗自身が人目を引いているわけではない。視線を集めていたのは、悠斗の目の前にあるものである。可愛らしい花柄の布の上に乗る小振りな弁当箱。中身は、牛肉と卵の二色のそぼろに菜の花をあしらった春色のちらしごはんだった。そうして、彩りに添えられていたのが、薄く輪切りにされたにんじんであり、それがハート型になっているのだった。

ハートが表すものを微笑ましい気持ちで見られる者は幸いである。ただ、悠斗のいる二年三組には、そのような幸福を持たない者が多いようで、悠斗の幸せを羨むような目をした。目だけではない。

「カノジヨの手製の弁当とか、マジふざけんよ」

「超うまそーじゃん。塩と砂糖を間違えたおにぎりとかでいいだよ」
「何で佐々木なんだよ。何で佐々木なんだよお」

などなど怨嗟の声も上がっていた。

悠斗は弁当を渡してくれた少女に助けを求める視線を送った。テーブルの向こう側にいる彼女は、恥ずかしがるような振りをして俯いていた。座っている椅子の上で、体を小さくしてさも遠慮深い風であるが、この状況を楽しんでいるだろうことは悠斗には分かっていた。なにしろ、そもそもそつと渡してくれば良さそうなものなのに、弁当箱を渡してくれるときの少女の声はやたらと通る声だったからである。どうやら、交際相手をからかうのが彼女の流儀だということとは、昨日と今朝のことも考え合わせると、十二分に理解できた。大して分かりたくもなかったが。ただ、それにしても、恋とは恐ろしい。からかわれても悠斗の心に波立つものがない。心の水

面に小波一つ立たないのである。

とはいえ

問題は、志保シホのからかいがクラスへ及ぼす効果である。彼女の悠斗へのラブラブアピールは確実にクラス内の男子をいら立たせている。そしてその苛立ちは理不尽なことに志保へではなく、悠斗に向かうのだった。このままだと遠からず男子の中で孤立することを恐れた悠斗が、そのことを告げると、志保は、

「だから？」

と事もなげな様子で問い返してきた。昼食後の廊下である。図書室に誘ってくれた志保の隣を悠斗は歩いている。悠斗の足が重くなつた。二年生になって一週間ほどしか経っていないのに、クラスの半分から敵視されているというこの危機的な状況を志保は分かっているように見える。

「分かっています」

「じゃあ、どうして？」

「選んで欲しいから」

「選ぶって……？」

「クラスの男子との友情か、わたしか」

突然に決断を迫られた悠斗は言葉に詰まった。律儀に利益衡量してしまつたのである。そんなことをする必要がないことが分かつたのは一瞬後のこと。志保が吹き出していた。

「今のはマイナス十点だね。佐々木くん」

失敗に気がついた悠斗に、志保はたしなめるように言った。女子に選択を迫られたら常にその子の方を取るような決断をしなければならぬという鉄則を教わって一つ賢くなる悠斗。ついでに、今の失点を取り戻すために、対志保との関係でどうすればプラスの点数をもらえるのか訊いてみると、

「積極的になることです。受け取るのではなくて、与えること。それができる人は好ましいですね」

という答えが返ってきた。

なるほど、とうなずいた悠斗の行動は速かった。翌日の昼食も弁当だったのだが、今度は悠斗が志保の分の弁当を用意してきた。普段、全く料理などしないので、ひどく手こずったが、母に手伝ってもらいつつ作ったそれは中々の出来になった。パカッと弁当箱の蓋を開ける期待に輝く志保の目が急速に光を失うのが悠斗には分かった。志保の弁当を覗き込むクラスメートの女子たちが、きゃっきやつと歓声を上げている。それもそのはず。昨日の返礼に、ピンクのさくらでんぶで白いご飯にハートマークをつけてやった上に刻んだ海苔でLOVEと書いてやったのである。さらに、斜めに切ったウインナーをVの字に合わせてそれでもハートが作られている。

もしかしたら悪ノリが過ぎたかと恐れた悠斗だったが、杞憂だったらしい。

「ちよつと面白かったから、プラス二十点をあげるわ」

その日の放課後、帰路を取りながらそう告げてきた志保の声は温かいものだった。また、嬉しい誤算もあった。カノジョに弁当を作ってくるマメな男ということで、悠斗は、恋人の為につくす涙ぐましいヤツだということになって、男子から評価を改められたのである。一方的に美少女に惚れられている羨ましい男から、彼女の歡心を得るために多大な努力をしなければいけないという可愛そうな男へと。

「これでどうにか一人ぼっちにならなくて済みそうです」

「わたしが言った通りでしょ」

志保は、腰に両手を当てて胸を張り適当極まりないことを言ったあと、

「ところで、佐々木くん。今週末ヒマ？」

悠斗をどきまぎさせる質問をした。

「年中ヒマを持って余しています」

期待に震える声で答える悠斗の前で、志保は両手を打ち合わせた。「良かった。じゃあ、遊園地と水族館、どっちがいい？」

「デ、デ、デートのお誘いですか？」

こくりとうなずく志保に悠斗は有頂天になったが、一つお願いしたいことが、と続けた彼女の口元に妖しげな微笑が浮かんでいるのが見えて、その唇が発した言葉に一息に地上に引き戻された。

「根岸さんを誘ってもらいたい」

全く想定外のこと、悠斗はすぐには反応ができなかった。それでは、デートというより、仲の良い三人で遊びに行くといった風情になってしまう。

「三人じゃなくて、四人です」と志保。

「どうのことですか？」

「ダブルデートというやつです」

志保の説明によると、彼女と同じ部の男子の先輩に葉月のことが好きな人がいるという。その彼が、志保に、葉月を紹介して欲しいと頼んできたという。

「わたしは根岸さんと全然仲良くないけど、佐々木くんがいるからね。わたしが佐々木くんをお願いして、佐々木くんから根岸さんに伝えてもらいたいってことなんだけど」

何でもその先輩は、悠斗と葉月が幼馴染みであるということを知っているらしい。

悠斗は自己嫌悪に陥った。カノジョでも何でもない葉月のことを他の男子に紹介するのに抵抗を感じたからである。ついで、がっかりしたものを感じた。初デートが、その志保の先輩の発案によるものだということが分かったからだ。さらに、

「戦線布告という意味もあるわ」

志保が楽しそうに言った言葉に身が震えた。

「佐々木くんがわたしと一緒にいるところを近くで見たら、さすがに平気じゃいられないんじゃないかな、根岸さんも」

可愛いカノジョとのデートになぜか血臭を嗅ぐ悠斗。

流れるのが誰の血なのかと考えるとぞっとした。

「うそ。瀬良先輩がわたしのこと好きなの？」

志保と別れたあと、家に帰り自室で葉月に電話して用件を告げる

と、弾んだような声が返ってきた。そうらしいです、と相槌を打つ悠斗の声は固い。

「行きますか？」

「行くに決まってるでしょ」

「好きなんですか？」

「瀬良先輩のこと知らないの？ カッコいい人だよ」

「じゃあ、告白されたら付き合っくんですか？」

「それは分からないけど……土曜日次第だね。話してみて良さそうだなだったらす」

さっぱり分からない。

電話を切った悠斗は、フローリングの床に座り込んだ。

志保に告白する前であれば、この気持ちを明確に嫉妬であると定義づけられたであろう。いや、もしかしたら嫉妬かもしれないが、それは恐ろしい可能性だった。他の女の子と付き合いながら、幼馴染みの少女も気になるとはどれほど軽薄なのだろうか。

ボクは軽薄な男なんだろうか。

つらつらと考えてみれば、そもそも、一目ぼれした瞬間に告白するがときは、その最たるものと言えるのかもしれない。その辺のナンパと大差ない。

『君に一目惚れしちゃったんだ。ちょっとその辺で話さない？』

路上で、道行く女の子に声をかけるちゃらちゃらした男の図が頭に浮かんだ。

うわあああああつ！

デートのことを考えるたびに葉月への嫉妬めいた想いが蘇り、初デートの日まで悠斗は眠れぬ夜を過ごすことになった。

第7話：想い、錯綜して

記念すべきその日。待ち合わせ場所の駅前広場に着いたとき、他の三人は既に到着していた。顔見知りの二人のうち一人が近づくと、悠斗^{ユウト}を見て目を大きくした。

「佐々木くん、大丈夫？ 具合悪いんじゃないの？」

「いいえ、平気です。昨日、あまり眠れなくて」

志保^{シホ}の心配そうな顔に答える悠斗の声は、げっそりとしたものだった。ここ数日、自分の中で澱む気持ちがあつて、それが発する腐臭を嗅ぎすぎたせいである。昼間は学校があつて気が紛れるのでまだ良いのだが、夜、部屋で一人になると、己の醜悪な心と嫌でも向き合わざるを得なくなる。嫉妬、不実と名づけられたそれらと戦っている、夜が白々と明るくなってくることもしばしばだった。昨夜もその類である。

じいっと志保の切れ長の瞳に見られて、悠斗は戸惑った。彼女が、疲労しているカレシにも容赦ないことが分かったのは、

「それで？」

とだけ言つて両手を広げてみせたからだだった。ターンでもした方がいいですか、と続ける彼女に、悠斗はその必要はないことを告げた。フリルのついた黒のペチスカートと白のシフォンチュニックという装いの志保は、セミショートの髪をヘアピンで留めてうなじを見せていた。

「可愛いです」

少し離れたところにいる二人をはばかりって小声で言うと、志保は満足そうにならずきつつも、次からはもっと早く褒めるように、という注意も忘れなかった。

「はじめましてだな、佐々木くん」

悠斗の目が志保から移る。移った先に初対面の少年の姿がある。悠斗より頭一つ分高い体は細身ではあるが弱々しげなものはない。

おうつつのない滑らかそうな肌に、綺麗に手を入れた肩。二重の瞳に爽やかな色があつて、同性の視点から見ても異性に対する魅力があるだろうことが分かる少年だった。Ｔシャツとジーンズという簡素な格好だったが、本当にかっこいい男はそれで十分なようだった。同じような格好をしている自分が、悠斗にはいやに粗末に思えた。

「大丈夫か？」

出会つて数秒で軽い敗北感を感じさせてくれた彼の名は瀬良太一^{タイチ}。悠斗は知らなかったが、校内では結構有名な先輩らしい。悪友の池田によると、

「二三ヶ月周期でカノジョを替えるうらやま……いや最低の先輩だ」ということだった。詳しく聞くと、バドミントン部で二年生のときからレギュラーを張り、甘いマスクに、成績も悪くないということで、校内女子による『カレシにしたい男ランキング』のトップ付近にいるということを教えてくれた。

大丈夫です、と悠斗が答えると、瀬良は屈託の無い笑みを見せた。ころころと付き合う相手を替える不誠実の塊のような男にしては邪なものがない。そう思うのは、ひよつとすると自分の方に邪悪なものが宿っているせいなのだろうか。悠斗は背に嫌な汗が流れるのを感じた。

「じゃあ、行こう」

その声をかけて、瀬良が駅の構内へと向かうと、その隣に暖色の小花柄のワンピースを身に着けた少女が並んだ。いつも頭の上の方でまとめられてあるポニーテールが今日は解かれて、黒髪がはらりと肩を隠している。たったそれだけのことなのに、幼馴染みの少女はぐんと大人っぽく見えた。

「マイナス五十点」

脇を肘でつつかれながらかけられた声に言い訳しようと思ったが、うまい言葉が出てこなかった。

電車で二駅して少し歩いたところが、今日の目的地だった。この

辺りの行楽地の一つになっている遊園地である。休日で、多くの家族連れやカップル、中高生で賑わっていた。その賑やかさから離れたところに、ひとり悠斗はいた。これがもし志保と二人きりだとしたら、この遊園地にいる誰よりも興奮していただろうが、Wデートのもう一組に目を向けると何とも落ち着かない気持ちになるのだった。混乱にさらに拍車をかけるのが、瀬良の性格である。彼の態度は全く公平無私だった。一学年上の余裕なのだろうか、葉月^{ハツキ}狙いはずなのに、志保にも悠斗にも同じくらいよく話しかけてくる。まるで何かのパーティのホスト役のような振舞い方である。葉月というよりは、三人といて楽しそうな雰囲気だった。

モテるはずだよなあ……。

同性の悠斗でさえ瀬良といてふっと心弾むような気持ちになるのだから、女の子だったら尚更だろう。瀬良が何か話すたびに、葉月の薄桃色の唇から軽やかな笑聲が上がる。そうしてその声を聞いたびに心底に重く溜まるものが、悠斗にはあるのだった。

「よし。じゃあ、ここからは自由行動ってことでいきますか」

四人で幾つかアトラクションに入ったあとに、瀬良が提案した。

「シホの初デートだしな」

その瞬間、志保はそれまでのおとなしやかな態度を一変させた。

「先輩。今後はわたしのことは名字で読んでください。今まではいいですけど、今はもうカレシがいる身ですから」

強い声に、瀬良はのけぞる振りをした。葉月も一驚していた。悠斗はもちろん驚きはしなかったが、その澄んだ声音に申し訳なさを覚えていた。そんな風に気を遣ってもらうに値しない男である對自己分析する悠斗に、意味ありげな微笑を送る志保。その微笑の意味を、

「ちょっと根岸さんの反応を見たかったんだ」

と、瀬良・葉月組と別れて、二人きりになったときにわざわざ教えてくれたのは、彼女の誠実さゆえと思いたいところである。

「な、なんですか？」

こちらを覗き込んで来る少女の顔が近くて、悠斗がうるたえた声を出す、

「あの二人の後姿をいやに見てたなあと思ってさ」

志保は長い睫毛をしばたたかせた。

「気になるんだ？ カノジョとの初デートよりも」

「そ、そんなことありません」

「怪しいなあ。今日の根岸さん、いつにも増して可愛いし」

「せ、先輩です」

「はい？」

「先輩を見てたんです。カツコイイ人だと思って」

志保は悠斗から身を離すと、ああ、と地に向かって嘆息した。

「根岸さんだったらともかく、瀬良先輩に負けるなんて」

悠斗は近くのスタンドからアイスクリームを買ってくると、付き合っているカレシが自分より他の男の子に興味を持ったことに傷ついた少女の心をそれで癒そうとした。

「ありがと」

コーンを音高く噛み砕いた志保は気分を改めた振りをして悠斗の手を引いた。

二つ三つほどアトラクションに乗ると、待ち合わせの時刻になった。お昼ご飯は、瀬良・葉月組と合流して食べることになっている。好きな女の子との初デートで、二人きりで行動できて楽しいはずであるのに、悠斗は全く心浮くものがなかった。どうにも葉月のことが気になって仕方ないのである。二人が笑い合っていたり、手を取り合っていたりする図が浮かぶと、胸の中に黒い霧のようなものがかかる。その向こうに志保がいるのだが、彼女の輝くような美貌でも照らせないほど深い霧なのだった。

「何だかな。わたしの計算違いだったみたいだね」

合流場所に向かって歩きながら、志保は落ち着いた声で言ったが、続けられた内容は悠斗を動揺させた。

「根岸さんのこと好きだったことに気がついたんでしょ」

悠斗は慌てて謝ろうとしたが、志保はさせなかった。彼女は悠斗の前に回りこむと、胸の前で腕を組んだ。

「根岸さんのこと好きなら好きで別に構わない。ちょっと趣旨が変わっちゃったけど、これであたのこと根岸さんと取り合えそうだしね。ま、でも、もう勝負はついちゃってるかもしれないけど。もし、佐々木くんが根岸さんのこと選ぶなら……え？」

悠斗が謝ろうとしたのは、葉月への想いに目覚めたということではなく、葉月への想いが何であれ志保とのデートの時間をないがしろにしたことに関してであった。

「じゃあ、根岸さんのこと好きだってことに気がついたりしたわけじゃないんだ」

志保は畳んだ両腕を広げて、いかにも詰まらなそうな口調で言った。

「やっぱりボクのこととは特別好きってわけじゃ……」

淡い諦めとともにどうにも確認せざるを得ない気持ちの悠斗に、志保は、うん、とうなずいていた。

「でも、嫌いじゃないよ。嫌いな人とこんなところ来ないしね。ただ、好きって感じになるにはまだ獲得点数が不足してますね」

「何点必要なんですか？」

「それを聞く資格は今の佐々木くんにはまだ無いんじゃないかと疑ってます」

にこやかにそう言った志保はくるりと悠斗に背を向けた。

幼馴染みへの気持ちを整理しないことにはカノジョに好きになつてもらう資格がないということ悟らされた悠斗だったが、とはいえ葉月への気持ちはどういうものなのか、やはり判然としないのだった。

第8話：幼馴染みへの想い

答えは意外な所からやってきた。しかも、あっさりと。園内のレストランで昼食を済ませたあとのことだった。食後のお茶を取っているときに、瀬良が、

「ちょっとでいいんだけどさ、パートナーを交換しよう」と提案してきた。

「わたしを狙っても無駄ですよ。付き合い始めて数日で今ラブラブですからね」

牽制する志保シホに、瀬良は手を振って、

「お前を狙ってるなら、とっくの昔に告白してるよ」

剣呑なことを軽く言いながら、彼女の疑念を否定した。瀬良の整った顔が微笑を含んで向かったその先に悠斗ユウトがいる。

「先輩、わたしのカレシをどうするつもりですか？」

「安心しろ。取り合う気はないよ。話をしたいだけ」

レストランを出たあと、志保と葉月ハツキを残して、悠斗は瀬良に誘われるままに歩いた。何の用があるのだろうか、と悠斗は考えてみたが、考える必要がないということに気がつくのに大した時間はかからなかった。悠斗に純粋な興味があって話をしたいという可能性は排除しておく、残りは志保か葉月に関する事に限られる。瀬良が先に言った通り、志保にも興味がないとすると、おのずと答えは絞られるだろう。

「話っているのは、ハヅキちゃんと君のことなんだけどさ」

悠斗の推測通りのことを瀬良が切り出してきたのは、一、三分歩いたあとのことだった。すぐ近くにメリーゴーラウンドがあり、楽しげな音楽に乗って子どもたちが騎乗している姿が目に入った。

「ほんとの所、どうなのかな。君たちの関係？」

そう続けた瀬良の声には、疑いの色も含まれていたが、それよりも興味の色の方が濃かった。その色合いが悠斗には不快だった。本

当に葉月のことが好きであれば、彼女と親しい関係にある悠斗に対して疑いの色が全面に出るべきである。悠斗はそっけなく、幼馴染みです、とだけ答えた。

「それだけ？　好きだったりしない？」

「何でそんなこと聞くんですか？」

「もし君がハツキちゃんのこと好きだったりしたら、何か申し訳ないだろ」

「意味が分かりません」

「幼馴染みを奪うようなことはしたくないってことだよ。オレ、今日告白するつもりだから」

不機嫌な態度で固い口調を取る悠斗に対して、瀬良の声はあくまで柔らかい。柔よく剛を制す。悠斗は、打ちのめされた思いがした幼馴染みとカノジヨの間で心迷わせる自分に対して、好きな女の子のその男友達にまで心配りのできる少年。その差は、一学年分の差だと思いたい所であるが、では今の瀬良の振る舞いが来年自分のできるかと考えれば、そんな自信は全くなかった。

「おい、どうした？」

顔を俯かせた悠斗の頭上から心配そうな声が降る。

「もし、ボクがハツキに幼馴染み以上の気持ちを持つてると言うたら、先輩は告白をやめるんですか？」

顔を上げてそう訊いた悠斗は、自分が卑怯な人間だということが十二分に理解できていた。お、と驚いた声を上げつつも楽しそうな顔をしている瀬良の前で、悠斗が思っていたのは、

考える時間が欲しい。

ということだった。葉月に対する気持ちが一体何なのか。そうして、その気持ちをはっきりとするまでは彼女に誰とも付き合っ欲しくない、という恐ろしく自分勝手なことを考えていたのである。自己嫌悪に陥る悠斗だったが、ありがたいことにその時間はあまり続かずに済むことになる。

「やめるよ。でも、それなら、どうして他の女の子と付き合ってる

のかを聞くことになるけど」

すばやく切り返された瀬良の返答に、悠斗は言葉を詰まらせた。瀬良の言っていることは正論だった。そしてそれに答えられないということは、瀬良に対して何らの要求もできないことを意味していた。

「単にキープしておきたいってだけならさ、そんな気持ちに遠慮するほどオレは人は好くないよ」

言葉とは裏腹に人の好い笑みを浮かべながらそう続けた瀬良の言葉に、悠斗の目が回り始めた。ぐるぐるぐる、と空が回転する。ふらつと体が揺れて、悠斗はもう少して倒れそうになった。

「おい、大丈夫か？」

瀬良に腕をつかまれてどうにか体勢を立て直した悠斗だったが、足に力が入らず、彼に助けられながら近くにあったベンチに座り込んだ。

謎は全て解けたような気がした。

あさましい、という一語に尽きる。瀬良の発した、キープ、という語がいかにも的確に葉月への想いを示しているように悠斗には思われた。自分は別の女の子と付き合いながら、幼馴染みには他の子と付き合わずに近くにいて欲しいという身勝手な思い。

最低だ……。

瀬良の言葉で、心にかかる霧は一掃されたが、その先にあったのは更なる暗黒だった。

「……ちよつと言いつキツかったか？」

後悔を滲ませた瀬良の声に、悠斗は顔を俯かせたまま無言で首を横に振った。もはや瀬良に言う言葉は何もなかった。彼の葉月への告白を止める権利など、悠斗にはありようもないと思われた。

ただし

ある行動をするために権利が必要という考え方は理性のものである。人は理性のみで行動するものではない。

一時間後に悠斗はそれを知る、いや確認することになった。

その日のWデートは閉園時間を待たずにお開きとなった。瀬良とのシヨッキングな話を終えて志保と葉月の元に戻ったときに、悠斗の顔色が蒼白であるのを心配した志保の提案によって、一行は帰路を取るようになったのである。空元氣を出すことも出来ないほど衰弱していた悠斗は、ほっとした。もうとてもカノジヨとのデートを続行したい気分ではなかった。帰りの電車に揺られながらときおりかかる心配の声に答える氣力さえ悠斗にはなかった。

「わたし、佐々木くんを送っていきます」

駅に着き自分たちの町に帰ってきて、解散というところで志保が言った。それが悠斗への心配か、葉月への挑戦か、瀬良への氣遣いかは、悠斗には判然としなかったが、志保の意図には興味がなかった。ただし、その言葉によって当然に引き起こされるであろう事態に、悠斗は心が締め付けられた。

次の瞬間、悠斗のスニーカーが十二分にその能力を發揮した。走行に適したそれは、履き主を一瞬で目的の場所へ届けていた。

「来てください、ハツキ」

瀬良と一緒に歩き出していた少女の手を悠斗は握り締めると、そのままぐいと彼女の手を引いた。葉月からは抵抗を感じなかった。手をつないだまま悠斗は走り出した。志保に告白したときと同様、頭に閃光が走ったようになって何も考えられなかった。瀬良と葉月が背を向けて歩き出したとき、

ハツキが取られる。

という声が耳奥で痛いほど鳴り響いた。その声に全てがかき消されて、志保に悪いという氣持ちも、葉月の迷惑も、瀬良の告白を邪魔することも全く省みる余裕はなかった。

駅前広場から大通りに出て歩道を幾分走り、横道にそれた所で、悠斗は足を止めた。時間にして、ほんの二分ほどだろう。寝不足で半日遊んだ上に心理的ストレスを受け続けた体には、それが限界だった。ハアハア、と荒い息をついた悠斗は、同じような呼吸音を間近で聞いた。

「ユウト、痛いよ」

その声に慌てたように、悠斗は手を放そうとした。が、まるで自分の意志を拒むように、なかなか離れてくれなかった。

「一体、どうしたの？」

突然の凶行にも関わらず葉月の声は穏やかで、走ってきて上気しているものの表情にも緊張の色がなかった。その態度に少し落ち着いた悠斗だったが、葉月の問いにどう答えて良いものやらさっぱりだった。瀬良と話しをして自分の葉月に対する気持ちを知り、瀬良と葉月の関係に干渉する権利など自分にはないということを理解したのが、つい一時間前の話である。にも関わらず、感情は理性をやすやすと裏切っていた。百歩譲ってその感情が恋の色で染め抜かれたいれば救いもあるのだろうか、

「……もしかして、わたしのこと好きなの？」

という葉月の問いに答えられないところに救いがたいところがあった。救われない罪人である悠斗は、分かりません、と正直に答えた。正直に答えることが、罪を償うことになることを願いながら。

「ハヅキを取られると思ったら、こんな行動を取ってました」

悠斗は体に心地よい重みを感じた。ついで、頬をくすぐる髪と、その髪からふうわりと漂う芳香を。

悠斗は葉月に抱きしめられていた。

第8話・幼馴染みへの想い（後書き）

最終話予定だったのですが、他の話に比して長くなりそうでしたので、予定を変更し、最終話の一話前になります。次で終わりますので、もう一話だけお付き合い頂けると幸いです。

最終話：未来で会いましょう

「ハツキ……？」

戸惑った声を出す悠斗の耳が、吐息をとらえた。

「……ギョツとして」

「え？」

「わたしのこと好きかどうか、確かめさせてあげるから」

悠斗は戸惑いながらも、背に回された少女の腕からかすかな震えが伝わってきているのが分かって、彼女の言う通りにした。葉月の真意はともかくとして、自分の為に無理をしていてくれることは理解できた。悠斗はぎこちなく葉月の背に手を回した。薄いワンピース越しに彼女の滑らかな肌を感じるような気がした。

「……強く」

耳元の囁きに促されて、悠斗は、葉月の体を自分に押し付けるようにした。彼女の体温と柔らかさに包まれて、悠斗の気持ちは解れた。体が宙に浮くような感覚を覚え、浮くと同時に今日の疲労がすうっと抜けていくようだった。ずっとそうしていたいと思ったが、しばらくすると背に回された腕が離れたのを感じた。終了の合図である。少し名残惜しいものがあつたが、悠斗は素直に腕から力を抜くと、少女と体を離れた。

ハア、と大きく息を吐き出した葉月が、

「どうだった？」

悠斗を見据えた。彼女の頬は少し赤らんでいるようだった。

問われた悠斗はどう答えて良いものやらさっぱり分からなかった。何もかも分からないことだらけである。とはいえ、葉月が今したことが、幼馴染みに対して普通にすることではないということから、分からないなりに答えてはいけないことは分かり、一言。

「気持ち良かったです」

そう答えると、葉月は苦い顔になった。

「変な言い方しないでよ」

「でも、本当のことですから」

「……ドキドキは？」

「はい？」

「ドキドキしたかって訊いてるの」

不思議なことに、その問いには明確にNOと答えるほかなかった。今まで女の子を抱きしめたことなどなく初体験であることを考慮すればどきどきしそうなものだが、胸の鼓動は速くなってはいなかった。静かに首を横に振る悠斗に、

「それが答え。ドキドキしないなら、ユウトがわたしに抱いている気持ちは恋じゃないよ。多分、三谷さんに同じことされたらドキドキすると思う」

そう答える葉月の声は確信のある調子だった。悠斗は、彼女の理屈よりも、その理屈が導き出した答えからさらに導かれることの方が知りたかった。もし葉月に対する気持ちが恋じゃないとしたら

「ただの独占欲。幼馴染みと離れる寂しさ。それだけ」

はつきりとした葉月の声に打たれ、思わず悠斗は目を瞑った。暗くなった視界に、キープ、という文字が鮮やかに浮かび上がった。

「どうすればいいと思いますか？」

「簡単よ。今すぐ駅前広場に戻って、三谷さんに謝る。許してくれるかどうかは分からないけど、でも謝ることしかできないでしょう」
悠斗が訊きたいのはそういうことではなかった。

「このハツキへの気持ちは？」

「……多分、時間が解決してくれるんじゃないかな」

湿り気を帯びた声で葉月が答えた。

時が経つにつれて、葉月が誰と付き合おうと気にしなくなる。彼女の隣に誰かがいて、でもそれは自分ではなく、そういう図を何も感じずに見られるようになる。考えるのは、今の悠斗の想像力では無理があった。仮にできたとしても、それは悲しいことのように思われた。

「仕方ないよ。ユウトが好きなのは、カノジョにしたいと思ってるのは、わたしじゃないんだから」

「もし……もし」の話ですけど……あの日、ボクが三谷さんに告白した日に、三谷さんじゃなくてハヅキに告白したら、受けてくれませんでしたか？」

微笑した葉月は首を静かに横に振った。

「ユウトのわたしへの気持ちは多分家族へ向けるものと変わらないってこと、分かってたから」

悠斗は葉月の答えに満足した。一目惚れ、という予想外のアクシデントが、しかし、起こるべくして起こったことであるかのように思われたからである。葉月はあくまで悠斗にとって姉のような存在であって、姉離れの時期が来たことを悠斗の心が反応して、志保のことを好きになったとも考えられるのではないか。そんな気がした。「こんな所に連れて来て本当にすみませんでした、ハヅキ。戻ります」

志保のことが気がかりだった。ひよっとしたら彼女はこういう事態さえ楽しんでいるかもしれないが、それは悠斗とは関係ない。初デートの日に他の女の子と逃避行をしてしまったことを、まず謝りたかった。そして、許されることなら、付き合ってもらいたいという気持ちがある。きっかけは一目惚れで、どこを好きになったかと問われれば口を噤むほかないが、好きだという気持ちだけは真実だった。

悠斗の眉がひそめられた。路地から大通りに向けた足の先に、葉月が立って、出口をふさぐようにしていたからである。

「ハヅキ？」

「わたしも、『もし』の話を一っだけしていい？」

葉月の口調はひどく真剣なもので、悠斗の急ぐ気持ちは両断されて消えた。悠斗が居ずまいを正すと、葉月の口が開いて、しかし、ためらっているかのように彼女の口は動かなかった。数秒後少女の唇から流れ出た言葉に、悠斗の頭は真っ白になった。

「もし三谷さんに許してもらえて、三谷さんと付き合っ……そうして、もし別れて、もしその時にわたしのことが気になったら……わたしと付き合ってみませんか？」

空白の頭のページに疑問符が書きこまれた。その疑問符が増殖を始めて、空白が全て埋め尽くされた。え、という間の抜けた声しか出すことができない悠斗に、白い頬を朱に染めた葉月が目をあらぬ方に向けながら、悠斗のことが好きです、というものはきはきとした口調とは対極に位置するぼそぼそとした声で言った。

「それってどういう『好き』ですか？」

「力……力……」

「蚊？」

「カレシにしたい『好き』です」

ええ、と悠斗は足を浮かせた。面を伏せる葉月の恥ずかしげな様子を見ながら、もう一度、悠斗は驚きの声を上げてみる。それしかできることはなかった。

「ハツキがボクのことを？」

「そ、そう言ってるでしょ」

目を下に向けたままの少女から、強ばった声が立ち昇ってくる。全然分らない。悠斗は自分の頭脳がそれほど高級なものではないことは分かっていたが、事実、学校の成績は二百人中よくて百二十位くらいである。それを差し引いても難題ではないだろうか。葉月は幼馴染みで、悠斗の恋の応援をし、今さっきは悠斗が彼女に寄せる想いが恋ではないと断定して、それでもなお悠斗のことを恋人にしたいという意味で好き。全く筋の通らない話であった。

「わたし、付き合ってた時があったでしょ。その時にね、さっきわたしがユウトにしたみたいに、抱きしめられてキスされそうになったの。抱きしめられたとき、わたし全然ドキドキしなかった。それどころか……その、ユウトの顔が浮かんで、その時初めてあなたのこと好きなんだって気がついて……」

細い肩を上下させながら言葉を喉から無理に押し出すような声音

で、葉月は説明してくれたが、他にもよく分からないことがあった。これは悠斗が訊ける筋のことではなかるうが、

「じゃあ、どうして告白しなかったんですか？」

混乱してとてもそこまでは気をつけられない。

「もしかしたら、ユウトも同じかなって思ったのよ」

葉月は顔を上げた。

「他の女の子と付き合ったあとに、わたしを……そういう意味で好きだって気がつくのかなって思っで。それにわたしだけ他の男の子と付き合うのは公平じゃないから。あなたが誰か別の子と付き合っで、で……その、別れるまでは告白しない……つもりだったんだけど。さっき抱きしめられて、いやこっちが抱きついたんだけどさ、でもあれか、ギョってしたのはそっちだし……いや、しろって言ったのわたしだったけ？ あーもう、どっちでもいい、そんなこと！ とにかく気持ちを抑えられませんでした、以上！」

「ごめんなさい、とぺこりと頭を下げる葉月。

悠斗は何を謝られているのかよく分からなかったが、

「これから三谷さんのところに行くのに、わたしの気持ちなんか聞いても、迷惑でしょ」

と葉月が分かりやすく説明してくれた。迷惑だという気持ちは悠斗にはなかった。葉月の気持ちは純粹に嬉しかった。ただ、その喜びが全身に響いてはいかなかった。

「いいの。わたしがそうだったから……だからさ、もし機会があれば、未来で」

「未来？」

「そう。未来で会いましょう」

「ハヅキはボクのことを待ってるってことですか？」

葉月は小首を傾げると、それは分からないな、と茶目つ気のある口調で言った。

「他に好きな人ができるかもしれないし」

「瀬良先輩とか？」

「瀬良先輩には興味ないよ」

「じゃあ、今日は何で？」

とは聞くだけ野暮な話だった。半月を少し膨らませたようなパツチリとした瞳に責めるように強い光を溜める少女に、悠斗は他のことを訊いた。

「もし機会がなかったら？」

一瞬呆気を取られたような顔をした葉月は、すぐに微笑みでそれを隠すと、

「三谷さんの所に行つて、ユウト」

と静かな声を出して、道を開けた。

「ハツキ」

「うん。またね、ユウト」

悠斗は葉月の顔を見ずに、彼女の横を通り過ぎると、もと来た道を走つて逆戻りした。志保の携帯に電話しようかとも思ったが、思いなおした。不貞な行為の言い訳を携帯越しになどしたら、何点引かれるか分かったものではない。もっとも、得点を気にする必要など既にないかもしれないが。駅前広場に戻った悠斗は、あたりをきよるきよると見回した。その目が一点で止まると大きく見開かれた。「勘違いしないでね。あなたを信じて待つてたわけじゃないわ」

唾を飲んでゆっくりと近づいていったベンチから、開口一番鋭い声が上がった。

「女の意地つてこと。自分が付き合つてる人が自分を置き去りにしていくつていうことを信じたくなかつただけよ」

そう続けた志保はベンチに腰掛けたまま、自分の前に立つ少年に對して目を細めた。

「勝つたの？ それとも負けたの、わたし？」

「勝ちです、三谷さんの」

志保は勝報に全く喜ぶ素振りを見せなかつた。

「微妙な勝利だな。それに、この勝利の後ろに根岸さんの影がちらつくし」

「何点ですか？」

分からない顔で言葉を詰まらせた志保に、悠斗は大きめの声を出した。

「さっきの行動。ボクがハヅキと一緒に走った行動に点数をつけてください」

「なかなか面白い見世物だったけど、その面白さを考慮してもマイナス千点くらいかな」

どうでもいいような口調で言う志保の前で、悠斗はほっと息をついた。

志保はうさんくさそうに、

「千点取り返せる秘策でもあるの？」

訊くと、悠斗は申し訳なさそうな顔にかすかに笑みを浮かべ、

「いいえ。ただ、点数をもらえるってことは、まだ付き合ってもらえるんだなと思って」

調子の良いことを答えた。ムツとした顔を作った志保は、

「もう一応は根岸さんに勝ったことだし、あなたへの興味はかなり薄れたんだけど」

冷たい声を出した。

「がんばります」

悠斗が熱っぽい声を出すと、志保は肩をすくめたあと、ベンチから立ち上がった。

「じゃ、まずカノジヨを家まで送ってください」

つんとした顔で歩き出す志保のその隣に並んだ悠斗は、これから何を想った。志保との現在がいつしか過去となつて、これから未来に再び葉月と出会うことがあるのだろうか。そして、今度出会ったときは、彼女の言うとおり幼馴染みとしてではなく、一人の女の子として見るようになってきているのだろうか。分かるはずもなかった。ただ確実に言えるのは、今は志保のことが好きで、志保にも自分を好きになつてもらいたいという気持ちがあるということである。未来で会いましょう。

葉月の声が悠斗の耳に鮮やかによみがえった。

最終話・未来で会いましょう（後書き）

ようやく一つ完結作品ができました。

拙い作品ですが、感想など頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6580g/>

未来で会いましょう

2010年10月8日14時49分発行